

＜特別活動＞

子ども一人一人のよさや可能性を生かす指導方法と評価の工夫

—— 第5学年の学級活動における集会活動の手だてを通して ——

沖縄市立中の町小学校教諭 池宮城 清 美

I テーマ設定の理由

特別活動は、子どもが互いに人間的にふれあい、協力し合うこと。そして、自己を正しく生かす場や機会が多くなることから、望ましい集団活動の実践を通して、いかなる場合でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる人間としての生きて働く実践的な力、共生の考え方つまり「生きる力」を培うことが大切だと考える。

本校の学校教育目標は、「進んで学習し、考えて行動する子。明るく、仲良し、協力する子。心も体も健康でたくましい子」である。本校教育目標具現化のため、自分の力を知り、それを伸ばすと同時に、他人と積極的に関わり、お互いを認め合い、励まし合い、賞賛し合いながら相互に向上し合う子どもたちを育む指導が肝要である。

これまでの学級活動において、司会グループを輪番制にすることで、恥ずかしがり屋の子やあまり積極的でない子が、グループと協力して行うことで役割を果たせることができた。「やればできる」という自信を持つことができた。また、本読みの苦手だった子が家で司会の練習を行ったり、運動の苦手だった子が、自分の得意な技があることに気づくことができた。自分の役割を果たすことができると、自分のよさや有用感に気づくようになった。しかし、学級活動の終了後の「友だちのよいところさがし」を発表する場では、「○○さんは、自分より発表をよく頑張っていた。」「司会をがんばっていた。」「みんな楽しくやっていた。」というようなものになりがちであった。相手のよさを自分の能力と比較してすばらしいと考えている子どもが多く、具体的な言葉が見つからず単に「がんばった」と答える子どもがいた。

私が望むよさとは、一人一人が自分の言葉・生きた言葉で表現でき、自分も友だちも認め合うことができることだと考える。そこで、よさを発見できる場や活動が必要であると考えた。一人一人の子どもたちが自分のよさや可能性を発揮できるような指導方法や評価を研究したいと考え、本テーマを設定した。

＜研究仮説＞

① 学級集会活動の計画・話し合い・実践の過程にお

いて、自他のよさを認め、励ましあえる場を持つようにすれば、よさや可能性が十分に発揮できる子が育つであろう。

② 学級活動において、自己評価や相互評価を工夫することによって、自己有用感や達成感を味わい、次の活動への意欲付けができるであろう。

II 研究内容

1 よさや可能性とは

子どもがもつよさとは、子ども一人一人の思いをはじめ、思考や判断、表現などの共感できるような内容、傾向などのことである。一方、可能性とは、本人や経験、教育や望ましい環境などによって、触発されたり、発揮したりしてよさになり得る潜在的な資質や能力である。「文部省小学校教育課程一般編」

子どもが自分のよさを自覚するときは、次のような場合である。他とのかかわりの中で、成功感や達成感を抱いたとき、友だちに自分のよさを認められ、集団の中で有用感や存在感を抱いたときなどである。このように子どものよさを見出し、生かしていくために、その根底にどんな意見でも最後まで真剣に聞き合い、受け止め、支持しようとする学級内の雰囲気があることが重要である。

2 集会活動の意義

特別活動は、望ましい集団活動を通して、なす事によって学ぶ教育活動としての特質を持っている。このような集団活動の特質とする集会活動は、子どもたちにとってから興味や関心が高い活動である。自分や友だちのよさやがんばりを発見することができ、自己理解や他者理解に有効な活動である。友だちと協力してやり遂げた喜びを感じ、集団の中での自己有用感を持つことができる活動である。一人一人が自分らしさを発揮できる活動であり、楽しく参加することで社会性を伸ばす活動である。

3 集会活動でよさを発揮するための手だて

子どもが集会活動を通して、自分のよさを発揮しながら、「話し合い」「決定し」「実践していく」活動過程で「自分の考えが言えた」「友だちの考えが分かった」「自分たちでよりよいものを相談して決めた」「自分たちで知恵を絞りあって解決できた」「みんなと協

力してやれた」という満足感、達成感を経験させたい。そのために、受容的雰囲気作りをする。子ども一人一人が活躍する場を設定する。自信を持って話し合いに臨めるようにする。集会活動が終わった後

に振り返りカードの反省を基に肯定的な評価を発表し合う。子ども一人一人が、自分を振り返ったり、学級を振り返ったりする時間を意図的に設定する等の手だてを考えた。

4 子どものよさを生かした学級活動の流れ

学級活動は、「計画委員会」、「話し合い活動」、「集会活動（実践）」と流れていく。教師の手だてを通して、子ども一人一人を認め、励まし、賞賛することによって、子どものよさや可能性を見つけ生かすことができる。

段階	過程	子どもの活動	ねらい	子どものよさを生かす教師の手だて
活動計画作成 1時間	問題発見	計画委員会活動 ①学級生活の充実と向上に要望の収集をする。	・日常の学校生活の中から自分たちの生活にやりたいことを見つけていることができる	・議題選定用紙を作成し、書き方を学級全員に教える。 ・議題提案用紙に自分の考えを書かせる。 ・学校生活の中から問題の存在に気づき、それを提案した子どもを賞賛する。 ・子どもが自ら計画委員会を運営するためにシナリオをつくる。
	問題の共通	②学級全員の参加による問題の整理・選択と自我関与できる議題の決定をする。	・子どもたちが、お互いに出し合った問題の中から議題として取り出すことができる	・子ども自らが計画委員会の運営を行い、議題の選定や見通しを持った実施計画を立案させる。 ・議題選定に当たっては、全員で集められた議題を一つ一つを大切に整理し内容を検討させる。
	実施計画作成	③話し合い活動の実施計画作成をする。 ・提案理由の設定 ・役割分担の決定 ・話し合いの柱の決定 ・事前準備 ・実施計画発表	・話し合う内容や、話し合いの順序などを友だちと協力しながら決定し、話し合い活動までの準備をすることができる。	・選定外の議題も解決の仕方を考え適切に処理すること。 ・提案理由に言葉を付け加えたり、除いたりすることで話し合いの方向が分かるように助言する。 ・話し合いの意欲を持たせるように全員で目当てを読み上げさせる。 ・話し合いの柱の中で特に重要なものはどれかを考えさせる。 ・資料を提供したり、資料の集め方を知らせる。 ・学級会ノートに話し合いの柱について自分の意見をまとめさせる。
学級話し合い活動の時間 1時間	活動の始め	④問題の把握をする ・役割分担の紹介 ・提案理由の説明 ・話し合いのめあての確認	・議題と提案理由を再確認させ問題点を明確にし解決意欲を高めさせる。	・時間をかけ、議題に対する自分の解決策や考えを準備しよりよく分かってもらえるように資料の準備をさせる。
	活動の展開	⑤解決方法の話し合いをする。 ・自我関与 ・自己理解、他者理解 ⑥解決方法の発見をする ・集団決定⇒自己決定	・みんなで話し合いに参加し、協力しながら問題を解決し、学級での所属感、連帯感を深める。 ・学級のメンバーの相互理解を深める。	・話し合いは、訊き合いであり、関心を持って訊くことで話し手のよさや可能性を引き出すようにさせる。 ・少数意見の長所利点も取り入れて話し合うようにさせる。 ・話し合いの行き詰まりを打開したり、話し合いの方向を修正する助言をする。 ・発言を手助けする助言をする。
	活動のまとめ	⑦実施計画の立案をする ⑧集会活動の役割分担をする。 ⑨話し合いの反省と評価をする。	・学級集団の中で自己実現させる。	・司会グループのがんばりを賞賛する。 ・考えた努力や発言した勇気、協力的で認め合う態度など、一人一人に目を向け賞賛と激励をする。 ・実践に対する意欲を高め、自信と期待を持たせるようにする。
実践 1時間	集会活動過程と評価	⑩役割分担に基づいた実践活動をする。 ⑪学級生活の充実と向上に努めるようにする。 ⑫自主的、実践的な活動に対する成果の評価をする ・自己評価 ・相互評価	・決まったことをみんなで協力し合いながら実行することができる。 ・創意工夫することができる。 ・民主的な集団を成立させる。 ・子どもの発意を大切にし自治的な実践活動を体験させる。	・集会活動の準備時間を計画委員と相談しながら設定する。 ・一人一人の活動の高まりを認め、他人から必要とれていることを実感させる。 ・結果だけでなく過程を重視した声かけをする。 ・失敗の中にも存在する肯定的な要因を具体的に指摘する。 ・「拍手」「うなずき」で語りかけ応答する。 ・子どもの言動に対して、指示や命令など一方的な言葉で決めつけたり、人間性を否定的に評価しないようにする。

5 評価について

これからの評価については、子ども一人一人の伸びようとしているよさや可能性を伸ばし、その自己実現を支援していくことが大切になってくる。「文部省発行指導資料より引用」

(1) 計画委員会から集会活動までの評価の工夫（学級集会活動の中で教師が評価する際の観点）

① 計画段階での評価

ア 議題選定の際に、子どもたちの発意・発想が大切にされていたか。

イ 議題に対する意見を持って話し合い活動に参加していたか。

ウ 期日、時間、場所、集会の目当てなどが決められたか。

エ 全員が共通の目当てを持つことができたか。

オ 役割分担が一人一人のよさを生かして決められたか。

カ 全員に出番がある学級集会活動が計画されたか。

キ 集会当日に向けての意欲付けがなされたか。

② 準備・練習をしている際の評価

ア 時間の保障と場所の確保ができたか。

イ 役割ごとに全員が協力して準備・練習しているか。

ウ 計画通り、準備・練習することができたか。

③ 当日の活動の評価

ア 一人一人の出番が生かされていたか。

イ 自分の役割を発揮していたか。

ウ 成就感や所属感が味わえた活動であったか。

④ 事後の評価

ア 集団としてのまとまりが一層高まったか。

イ 一人一人の児童が学級の中で生き生きとしてきたか。

⑤ 評価する際の留意点

ア 子どもの集会活動における表情、発言、行動などを観察し、子どもの伸びようとしているよさや可能性を把握するようにする。

イ 教師の評価を補充するために、子どもによる自己評価や相互評価を活用する。

自己評価とは、端的に言えば「自分自身を点検して今ある自分を知る。」ということである。自ら学ぶ意欲を高めるという観点から、子どもたちによる自己評価は、子どもたちが自分の目標をどの程度実現しているかを把握し、次の活動を主体的に進めることができるようにするとともに、自分のよさに気づき、自信を持つようにする上で大切であると考え。

相互評価では、子どもたちがお互いに評価し合う中で、お互いのよさを認め合う力、高め合う力を養うことが大切であると考え。

III 指導の実際

1 活動計画と評価計画

月 日	時間	形 態	指 導 目 標	活 動 内 容	評価方法
6月18日 (金) ～ 6月19日 (土)	2日間		・少年自然の家などの目的地の自然の中で寝食をともにする集団生活を通して、学校生活ではみられない友だちのよさを発見できる。	・ 宿泊学習を楽しく過ごそう みんなと協力し合い、共に喜び楽しく過ごす。	観察法
6月25日 (金)	放課後	児童 教師	・計画委員会のシナリオや計画委員を経験した子を役立てて計画委員会の立て方や進め方を理解することができる。 ・宿泊学習を振り返り、友だちのよさが生かされるような話し合い活動の計画が立てられるようにする。	・計画委員会で話し合いの計画を立てる。 ア 役割分担の確認(司会、副司会、黒板記録、ノート記録) イ 提案理由の検討(提案理由が十分みんなに分かるようにまとめる。) ウ 話し合いのめあてを決める。 エ 話し合いの進め方(話し合いの柱を考える) オ 話し合いまでに準備するものを決める。	観察法
6月28日 (月)	朝の会	児童 教師	・学級会ノートに自分の考えをまとめておくことにより、自信を持って発言できる。	・司会グループから議題、提案理由の説明、担任が補足説明した後に自分の考えを話し合い会議ノート書かせる。	観察法
7月1日 (木)	5校時	児童	・楽しいサクセスパーティーになるように、みんなで協力し、計画を立てることができる。	・議題「ザ・サクセスパーティーの計画を立てよう」	観察法 自己評価 相互評価
7月13日 (火)	5校時	児童	・一人一人の出番があり、役割をもって会を進めることができる。	・ 本時 ・題材 ザ・サクセスパーティーをしよう	観察法 自己評価 相互評価

2 授業の展開

(1) 議題名 ザ・サクセスパーティーをしよう。

(2) 本時のめあて

① グループの出し物や係りの活動で自分の力を発揮することができる。

② 友だちと協力しながら、サクセスパーティーを楽しく進めることができる。

③ サクセスパーティーの中で、友だちのよさを認め、励まし、賞賛することができる。

(3) 本時の展開

過程	活動内容	教師の支援	育てたい資質や能力・評価の視点
活動のはじめ 1分	1 始めのあいさつ	- 自分の考えた原稿を基に発表しやすくする。 - あいさつ係に、原稿を準備させ全員に呼びかけるようにする。 - あいさつを聞いて、集会活動のめあてを確認する。 - 教師は学級全員に集会活動のめあてを事前に知らせておく。	- 自分から進んで行動したり友だちをと協力して実践しようとする。 - 自分のめあてに向かって努力する。(関心・意欲・態度)
活動の展開 三十五分	2 宿泊学習のテーマソングを歌う。 3 グループの出し物 (1) モンスターグループ ナイトウォークラリーの出来事で楽しかったことを劇で発表する。 (2) 五木部里台集気グループ 部屋での出来事や自由時間に写した写真を基に吹き出しで様子を新聞で表す。 (3) クマのプーグループ ナイトウォークラリー、炊飯活動、登山活動の中で、グループでの出来事をインタビューし、文に表したり4コママンガにしたりして新聞で表現する。 ナイトウォークラリーのことを中心に紙芝居で表現する。 (4) サバイバルグループ ナイトウォークラリー、炊飯活動、登山活動で起こった楽しかった出来事を劇で表す。 4 宿泊学習までの計画委員会、話し合い活動でがんばっていた友だちや宿泊学習でがんばっていた子の表彰式 5 終わりのあいさつ 6 先生の言葉 7 振り返りカードを書く。	- テーマソングを歌うことで、楽しかった宿泊学習を思い出させる。 - 結果だけではなく、今までがんばっていたことを認めながら声かけをする。 「うなずき」で応答する。 - 拍手で答えるようにする。 - 発表しているグループを見るようにさせる。 - 恥ずかしがらず、できるだけ学級全員に聞こえるように発表することを助言する。 - 発表が終わり席に着くとそのグループの方へかけよう、励ましの言葉をかける。 - 宿泊学習までの計画委員会、話し合い活動、準備でがんばった友だちやすごいと思った友だちを文で表現する - 文を形に残るものとして、「あなたの良いところ」を賞状に書いて渡すようにする。 - 表彰されている友だちの方を見て、拍手するようにさせる。 - 自分の考えを発表しやすくするように原稿を書かせる - 会の締めくくりになるので、元気な声ではっきりと言えるように助言する。 - 一人一人の活動の高まりを認め、他から必要ようとしてられていることをしっかり言葉で伝える。 - 適切な評価を通して達成感や充実感、自己有用感を抱かせた活動であったことを知らせる。 - できるだけ具体的な言葉で自分のがんばったところや友だちのよいところを書かせるようにする。	宿泊学習を振り返るグループ発表の場において、お互いのよさを劇、紙芝居、新聞などで発表させることで、自分が集団の中で役立ち、グループでの協力の大切さを意識することができたか。 - 所属する集団活動をより充実したものにするとの意図の基に創意工夫する(思考・判断) - 集会の中で、自分の役割を通しての発表ができる(表現・技能) - 集会活動のねらいが分かり自分の在り方を理解している - 友だちと協力して活動することの意義が分かり、集団活動への参加の仕方が分かる(知識・理解) 子ども一人一人のよさの表彰を行うことで、自分のよさを実感し自信を持ち、次の活動への意欲が高まったか。 集会反省カードを書くことで、自分の可能性を発見し友だちのよさに気づくことができたか。
活動のまとめ 十分			

3 授業の考察

(1) 実践の内容

① 自己評価とグループによる相互評価による集会活動の様子とその考察

分析 1

自分が集団の中で役立っていることやグループの協力の大切さを意識することができたか。

準備や発表の場こそ、個人のよさだけではなく、対人関係上のよさを見つけ合える場である。ここでは、宿泊学習の出来事の中で活躍した子に視点をあて、グループのみんなが宿泊学習の行事を協力しあい、達成できたことを取り上げて発表会を行った。ア グループ発表の時、自分の役割がきちんとできたかの質問から下記の結果がでた。

表1 自己評価より

自分の役割がきちんとできた	人数
よくできた	20人
まあまあできた	10人
あまりできなかった	0人

<考察>まあまあできたの理由として、「せりふを覚えていると思ったけど、途中でまちがえてしまった。」「紙芝居で、大きな声で発表できたけど早くせりふを言いすぎた。」「うまくせりふが言えなかった。」「ぼやぼやしていた。」等があげられている。グループでの評価はよくできていたに印をつけている。

イ みんなと協力して最後までがんばりましたか。

表2 自己評価より

協力してがんばった	人数
よくできた	29人
まあまあできた	1人
あまりできなかった	0人

<考察>集会活動の準備、グループの出し物を練習することで、友だちと協力することの大切さを知ることができた。また、友だちと関わることでよさを認め合うことができた。

まあまあできたと自己評価しているRさんは、集団の中でどのように関わっていいのかを探っている状態である。友だちからの評価では、「何も言わずにそっとやってきて私たちの仕事を手伝ってくれた。」と言われ、自信を持ったようである。

学級の雰囲気としては、「どこの係りが準備をしていないよ、手伝ってあげよう。」「私も手伝っていいかな。」等の言葉かけをして一人一人が協力していこうとする態度がみられた。

自己評価をした後で、その理由を文章記述する事

で、活動の満足感を味わったり、問題点を明らかにすることができた。

相互評価は、自分の活動が支持されることで、自信を持ったり、自分の活動に対する期待感を知ることにつながった。そして、自己を生かそうとする意欲を高めるのに有効であった。

② 学級全員による子ども一人一人の相互評価の記述文から抜粋

分析 2

子ども一人一人のよさの表彰式を行うことにより、自分のよさを実感することができたか。

宿泊学習では、互いに協力せざるを得ない状況ため思いがけない友だちの頼もしさやよさの発見、そして人と人の関わり合いを通して学ぶ楽しさを味わった。

共に学び合っていく中で、優しさが「グループの仕事を進んで手伝ってくれた。」「ナイトウォークラリーの時、一番後ろで夜道をしっかり歩けるようにと電灯を足元に照らしてくれた。」「皿の後かたづけを何も言わず一人でやってくれた。」「炊飯場を一人で掃除していた。」「みんなの気持ちを考えて副班長の役割をしてまとめることができた。」と好意的にとらえている。

がんばったことを「先生からの話をみんなに忘れずに伝えたり、時間通りに次のことをやるようにと他のグループに迷惑をかけないように動いていた。」「夜遅くまで、班長としての話合いに参加していた。」「グループの人と絶対に喧嘩をしない、自分からみんなと仲良くすることなどをがんばった。」具体的に表現している。

このように、子どもたちの間で承認や賞賛などの肯定的な評価により自分のよさや可能性（自己の新たな力）を自覚することができた。また、よさを好意的に具体的に伝えられることは、自己有用感や達成感を味わうことで次の活動への意欲付けとなる。

③ 自己評価に対する相互評価との関連

分析 3

自己評価、相互評価を取り入れた反省カードを記入し発表することで、自他のよさを認めることができたか。

- ・自己評価と相互評価を組み合わせた評価方法
- ・①質問紙法による自己評価と相互評価
- ・②、③文章記述法による自己評価と相互評価

①

ゼミサクススパーディー 集会の反省カード	
() 集会の反省をしましょう	
① 集会は楽しかったですか	○ ② ③ ④ ⑤
② 各グループの活動がきちんとできましたか	○ ② ③ ④ ⑤
③ 知識が楽しく学べましたか	○ ② ③ ④ ⑤
④ みんなの協力して最後までがんばりましたか	○ ② ③ ④ ⑤
⑤ グループ活動の時、自分の役割がきちんとできましたか	○ ② ③ ④ ⑤

②

③

名前	がんばっていたところ
Yくん	おわりの発表をみんなの前で 頑張ったこと、みんなを 励ましていたこと。
Rくん	始めのあいさつを聞いてきて くれたみんなの前で頑張っ ていたこと。
Yくん	みんなの意見を聞きながら 今日の目標を聞いて、がんばっ ていたこと。
Kさん	

図3 集会反省カード

自己評価「ぼくは集会の進行係を最後までがんばって大きな声で発表できた。」

相互評価「進行係は、みんなで交代ずつでやって初めてのR君も大きな声を出して会を進めてくれた。」

自己評価「ぼくは、進行係を最後まで責任を持って行った。」

相互評価「T君は進行係で恥ずかしがらずに、静かにしてくださいと注意してくれた。」

自己評価「賞状づくりをSさんと一緒にがんばってつくった。」

相互評価「賞状係は、何も言われずに自分たちで考えて賞状づくりをしてくれた。」

自己評価「ぼくは、終わりの挨拶を自分で考えて書いて、みんなに聞こえるようにいえた。」

相互評価「Y君は、前もって自分で終わりの挨拶を書いてきて、きちんと自分の役割を果たしてくれた。」

自己評価と相互評価を行い、発表する場では、自分のクラスへの存在価値を認識し、自分がクラスのためにどうすればいいのかを考えることができた。

<主な参考文献>

文部省 『新しい学力観に立つ特別活動の工夫』
文部省 『小学校指導書・特別活動編』
大石勝男 『小学校 学級活動12ヶ月(高学年)』

文部省 1995
文部省 1990
文教書院 1996

また、自分の係りを責任を持って行いみんなのために役立っていることの喜びを知り、他もそれを認めていることを知ることで、自信を持つことができた。

IV まとめと今後の課題

本研究では、学校行事である宿泊学習を計画、実践し、振り返る活動を題材として取り上げた。人や自然との関わりを通して互いによさや可能性を見つけること。その中で互いにそれを生かし合い学び合っていくことができるような学級活動を展開することによって自己有用感や成就感を味わうことができると考えた。

その手だてとして、計画委員会、話し合い活動、準備、集会活動を通して、教師は日々の子どもたちの反応を共感的に受け止め、そのよさを認め励まし伸ばすような働きかけをしてきた。宿泊学習を振り返る活動の中から、お互いのよさを劇、新聞、紙芝居などによってグループで発表した。子ども一人一人のよさを具体的、好意的な言葉で表現し表彰する活動を通して、相手に伝える相互交流をさせた。

研究の成果は、第一に計画委員会、話し合い活動、準備、集会活動の過程で一人一人の子どもの活躍できる場を設定し、よさや可能性を認め励ます評価を行った。それによって、子ども自らが自分なりの課題を見だし、創意工夫したり、計画したりすることができた。また、自分の役割をいっしょうけんめい果たそうとする姿が見受けられた。第二に教師と子ども、子ども相互が分かり合おうと努力することで、認め合い、受け入れ、受けとめてもらえるなどの気持ちが生まれた。そして、応援してくれていると感じ合える楽しい雰囲気づくりができたことである。

研究の課題として、子どもはいつでも友だちに「自分のよさを認めてもらいたい」「自分の考えを聞いてもらいたい」という願望を持っているが、題材に興味がないと参加意識が薄れ、互いのよさを聞き合うことができなかったことがあげられる。

今後は、学級内の様々な活動が「線」とつながって、その活動から子どもたちが、知恵を出し合う相互交流の場から題材を見つけ、一人一人が共に学ぶ価値を見いだす子を育てるための支援の在り方を工夫していきたい。